

看護と生と死の教育

著者	中村 鈴子
雑誌名	聖学院大学総合研究所Newsletter
巻	Vol.18
号	No.2
ページ	11-12
URL	http://id.nii.ac.jp/1477/00002459/

Title	看護と生と死の教育
Author(s)	中村, 鈴子
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.18-No.2, 2008.9 : 11-12
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=4775
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

看護と生と死の教育

中村 鈴子

今日、終末期医療のあり方や生命・生活の質が注目され、医療の質やケアの質が求められてきている。看護基礎教育において終末期看護の重要性が強調されている。平成9年から実施されているカリキュラム（教育課程）では、終末期看護についての学習の必要性を述べられている。終末期看護ができる看護学生（以下学生）を育成するには、すでに学んだ理論や技術を対象（患者・家族）に援助する臨地実習が重要な役割をもっていると考えられる。しかし、死に出会う体験の少ない学生にとって終末期看護を実践することは、難しい。

現在の日本の学校教育（中等教育）においては、人間の生・死についての教育が十分なされていない現状である。学生が終末期患者の痛み、苦しみを受け止め、自己の死生観をもって看護を実践していくには、意図的な計画された教育的アプローチが重要であると考えられる。

平成9年よりN校において死生学教育を取り入れた教育課程を編成し実施した。その結果、看護基礎教育に死生学教育を取り入れること、学生が臨地で体験する終末期看護実習の重要性について述べる。

看護基礎教育：看護教育を生涯教育と位置づけ看護職に就くまでの基礎的教育

終末期：病気が治癒する可能性がなく、近き将来（およそ3～6ヶ月）死を迎える時期

死生学教育：「生と死」とは、表裏一体であり生の教育は死の教育である。

1. 看護と私

私は、友人が看護学校を受験するので一緒に誘われて、授業内容などもわからずに、力試しに受験をした。現在の看護学生の志望動機とは違い不純な動機であった。

私にとって初めて学ぶ看護は、未知の学問であったが、新鮮な学習であった。3年の実習時に九州の離島から癌の化学療法のために入院している

Aさんを受け持ち、援助した内容をケーススタディとしてまとめた。また、離島のために家族の面会が少なく、実習期間終了後も続けて援助していた。Aさんの臨終のときに呼ばれて、Aさんは、私に感謝の言葉と「よい看護師」になるようにと遺言を残された。その時が、がんセンターの看護師になることを決意した時であった。今振り返ると、Aさんへの実習から実践した看護が私にとって「死生学教育」の始まりであったと考える。

卒業後の国立がんセンター小児病棟での勤務は、実習では体験したことのない子供への援助であった。特に卒業後の1年間は、夜間、生後1年未満の乳児（網膜芽細胞腫：眼球内に発生する悪性腫瘍、片眼を摘出）に母親の代わりにミルクを授乳する時には、涙が止まらず側にタオルを置き援助したことを今でも思い出す。「どうしてこの病気なのか、生まれてきたばかりなのに、なぜ」、さらに急性骨髄性白血病、脳腫瘍で闘病する患児への援助は、私にとって「生きるとは」「死ぬとは」といつも考えさせられることとなった。「この瞬間に対象に必要な援助とは何か」を考える時間の極限と無限性についていつも突きつけられていた。

このような実践をとおして、看護学生時代に「生と死を考える機会」を学問として構築する必



講演の様子

学年	死生学教育内容	→ (授業科目)
1 年	1) 人間の生・死について	人間の死 死と宗教・文化 →文化人類学
2 年	2) 死の定義	生物の死 脳死 臓器移植 自殺→看護倫理 生殖医療 安楽死 →各看護学
	3) 悲嘆教育・グリーフケア	文学 心理等 →心理学 人間行動学 家族社会学 人間関係論
	4) 患者の死・ライフサイクルにおける死 2 人称の死、3 人称の死 患者を取り囲む社会	→各看護学
	5) 死の準備 終末期看護 ホスピス 在宅ホスピス QOL インフォームドコンセント 緩和ケア病棟の見学	→基礎看護学 (対象論Ⅱ・人間論演習)
3 年	6) 終末期患者の基本的ニーズの充足：日常生活の援助 終末期患者を受け持つ援助 緩和ケア（身体的・精神的・社会的・霊的）	→終末期看護実習
	7) 死生観の確立	→看護学対象論Ⅱ（人間論演習）死生観

要があることと、実習の大切さを体験させることが必要と考えていた。その機会は教育の場への異動となり実現した。

2. 看護基礎教育における死生学教育 (N 校)

看護とは、古くは病んだ人を世話すること、母親が子供の世話をすることも含まれていて人類発生から行われていたことである。歴史における疾病の変遷とともに 19 世紀にフローレンス・ナイチンゲールにより、近代の看護の土台が作られ専門職としての看護師育成が開始された。F・ナイチンゲールは、「看護者とは、他者の健康を預かるすべての人を指し、看護がすべきことは、自然が他者に働きかけるための最善の条件下に患者を置くことである。看護者は、患者の全身的なケアを行うことである」と述べている。つまり看護の対象は、人間であり、人間は、生まれてから死ぬ動物であり、人間は生活を営んでいることを意識して関わることでありと考える。看護基礎教育において生と死の学習の必要性を自己の体験をとおりて考え、特に知識と技術、態度を統合する実習を導入して段階的に学習できる教育課程を編成し

て実施した。

この教育課程を実施した学生（卒業生）の調査で、特に基礎看護学対象論Ⅱ（人間論演習）で生きることや死について考える機会となり、また、終末期看護実習は、看護学校の実習の中でも重要であったと回答があった。特に終末期患者・家族の気持ちを知り、今行わなければならないことについて考え、実践することの大切さや、その人らしさを尊重した関わりや患者の思いに気づくために話を聞くことの大切さを学んだと述べている。卒業前に考えて述べている「死生観」と現在も同じであり、実践から変化していることも記載されていた。このように看護基礎教育に死生学教育を段階的に学習できるように取り入れ、知識・技術・態度を統合する臨地実習に終末期看護実習の有効性を強調する。

(なかむら・すずこ 独立行政法人国立病院機構
千葉医療センター附属千葉看護学校 副学校長)
(2008 年 6 月 7 日、新都心ビジネス交流プラザ 4
階聖学院教室)